

# 英語圏の中心でパトワを叫ぶ

## ーリントン・クウェシ・ジョンソンのダブ・ポエトリーをめぐってー

Crying out Patois in the Centre of the English-Speaking World:  
Linton Kwesi Johnson's Dub Poetry

稲垣 健志  
INAGAKI Kenji

“Writing was a political act,  
and poetry was a cultural weapon.”  
(Linton Kwesi Johnson)

### はじめに

1952年、リントン・クウェシ・ジョンソン (Linton Kwesi Johnson、以下LKJ) はジャマイカのチャペルトンという町に生まれた。62年、母の後を追ってイギリスのロンドンに渡ったLKJは、イギリス・ブラック・パンサー党に参加し政治活動をおこなう一方、ロンドン大学ゴールド・スミス・カレッジに入り社会学の学位を取得する。そして、1970年頃からはパトワ (patois) と呼ばれるジャマイカン・クレオールで詩の制作を始め、さらにその詩をレゲエのリズムを加工してつくられたダブに合わせて朗読する「ダブ・ポエトリー」で、移民を周縁化するイギリス社会に鋭く切り込んでいくアーティストの一人となっていた。1974年に初の詩集 *Voices of the Living and the Dead* を、1978年には世界初となるダブ・ポエトリーのアルバム *Dread Beat an' Blood* を発表し、現在に至るまで精力的な活動をおこなっている。彼はなぜこのようなスタイルの作品を制作し始めたのか。本稿の目的は、具体的なLKJの作品を考察することではなく、その前段階として彼がダブ・ポエトリーをつくるにいたった社会的・思想的背景を粗描することである。

### 1. パトワとは何か

まずはパトワという言葉について確認してみたい。先述のように、パトワとはクレオール語のひとつであり、クレオール語とは植民地支配者の言語をもとに、奴隷を働かせプランテーションを機能させるために生まれた言語である<sup>1</sup>。アフリカ各地から奴隷としてカリブ・中南米に連れてこられた者たちは、共通の言語をもたなかった。植民地支配者との会話はもとより、彼(女)ら奴隷同士でもコミュニケーションがままならない状況だったのである。そこで支配者の言語 (イギリス植民地なら英語) を、語彙的にも文法的にも簡略化した言葉「ピジン語」がつくられた。このピジン語が時代を経て、やがて植民地で生まれ育った奴隷たちの「母語」となる。こうしてネイティブ話者を獲得した言語が、「クレオール語」と呼ばれるようになっていく。つまり、クレオール語という一つの言語があるわけではなく、島やその周辺ごとにそれぞれのクレオール語が形成されていったのであり、その中でパトワとはジャマイカにおいて英語がクレオール化した言葉なのである。

次に、LKJのファーストアルバムである *Dread Beat an' Blood* (1978) に収められている作品 *come wi guh dung deh* の詩を例に、パトワと英語の違いをみてみよう。タイトルの *come wi guh dung deh* の中で、*come* だけは英語表記と同じである。その他の言葉を英語に置き換えると、*wi* は *we*、*guh* は *go*、

dungはdown、dehはthereにあたる。よってタイトルを英語表記にすれば、come we go down thereとなる。また、詩の中ほどに次のような箇所がある。

di people dem a bawl / fi food dung deh  
dem cant get noh food / but food dung deh

ここでやや読みにくいのは、di people dem a bawlというフレーズであろう。peopleとbawlは英語表記と同じで、diはthe、demはtheyと置き換えられる。残ったaだが、bawlという動詞の前に置かれた場合、これは現在進行形を意味する。したがって、このフレーズを英語表記するなら、the people they are bawlingとなるのである。このように、パトワは英語を基にしながらも、語彙的にも文法的にもやや異なった特徴を持っている。

## 2. パトワを叫び始めたものたち

こうしたパトワのようなクレオール語は、しかしながら、「正統的な」ヨーロッパ諸語の不正確な変形という前提から、ブローケン・イングリッシュであるとか俗悪ポルトガル語といったように「劣った言葉」とみなされてきた<sup>2</sup>。第2次世界大戦後、カリブ海域、とりわけジャマイカから多くの移民がイギリスに渡ったが、彼(女)らはこの「劣った言葉」によって差別を受けることになる。こうした移民第1世代は、概して自らの言葉を直し、「正しい英語」をおぼえることで苦境を乗り越えようとした。しかし、イギリス生まれ、もしくは幼い頃にイギリスに渡ってきた移民第2世代は、自らの「劣った言葉」を積極的に使用していく。「母語」に対するこうした移民の態度の変化には、主に2つの要因がある。彼(女)らはなぜパトワを叫んだのか。本節ではこの点を確認してみたい。

ひとつめの要因は、1960年代のアメリカで興った公民権運動およびブラック・パワー運動の影響である。トム・W・スミスによれば、20世紀初頭までは「カラード」、その後1960年代までは「ニグロ」とい

うのが、アメリカにおけるアフリカ起源を持つ人たちを示す名称としては一般的であった。逆に「ブラック」とは不快で好ましくないものであり、「ブラック」と呼ぶことはそこに侮蔑の意味が込められていた<sup>3</sup>。しかし1960年代に入り、マーティン・ルーサー・キングやマルコムXが公民権運動のリーダーシップを獲得すると、彼らは「ブラック」という名称を積極的に用いるようになる。タリク・モドゥードが指摘するところでは、こうした運動の重要な要素のひとつには、それまで否定的・差別的な意味を持っていた「ブラック」を自称することで、「ブラック」という言葉がもつ意味をポジティブに逆転させ、「名付けの権利」を自らの手に獲得することがあった<sup>4</sup>。学生非暴力調整委員会(SNCC)の議長であり、一時期ブラック・パンサー党も率いたブラック・パワー運動の中心人物ストークリー・カーマイケルは、「ブラック」という言葉を使用する意義について、こう力説する。

もしわれわれが「ニグロ・パワー」といったら誰もこわがりはないだろう。しないどころか支持する者だっているかもしれない。もしわれわれが「パワー・フォー・カラード・パイプル」といったらみんなが支持してくれるかもしれない。しかしわれわれが使っているのは「ブラック」という言葉である。「ブラック」こそわれわれが用いている言葉である。<sup>5</sup>

このカーマイケルの演説からは、「ニグロ」や「カラード」を使って白人の支持を取り付けるという妥協を排し、「ブラック」に対する「白人の恐怖」をも闘争に活かそうとするブラック・パワー運動の急進性が見てとれるだろう。こうした「ブラック」をめぐるアメリカの運動は、キングやマルコムXのイギリス訪問なども相まって、すぐにイギリスの移民社会に影響を与え、LKJも参加するイギリス・ブラック・パンサー党が結成されるなどしていった。「劣った言語」パトワの意味を逆転させようという移民たちの運動も、旧支配者たちによって否定的な意味を与え

られたものを自ら肯定的なものに変えていくこの時代の歴史的文脈の上にあったのである。

パトワを積極的に使用していったもうひとつの要因は、イギリスにおけるラスタファリ運動の興隆にある。ラスタファリ運動とは、ジャマイカ出身の政治指導者マーカス・ガーヴェイが唱え始めた、アフリカ回帰主義・アフリカ中心主義の要素を持つ思想運動である<sup>6</sup>。1914年、彼は首都キングストンで万国黒人地位改善協会 (Universal Negro Improvement Association) という組織を結成したが、その目的は彼が抱いていたいくつかの夢に基づいている。その夢とは、まず一つ目に世界的規模の黒人種の組織を結成すること。二つ目に、孤立した後進的な植民地のアフリカを、すべての黒人が誇れるような自立した大国にすること。三つ目に、アフリカを世界の主要勢力の一員として、全ての黒人が帰還しうような発展した黒人国家にすること。四つ目に、黒人国家から世界の主要国・主要都市へ黒人の代表を送り出すこと。五つ目に、黒人文化を教授する黒人の教育機関を設立すること。そして最後に、あらゆるところにいる黒人を向上させるために運動することであった<sup>7</sup>。彼の運動は、当時イギリスの植民地であったジャマイカにおいて、当局と中産階級の人々からの反発があったが、貧しい人々を中心に多くの信奉者を集めた。1916年、ガーヴェイは運動を広げるためアメリカへ渡るが、その直前に演説で「黒人の王が王位につくときのアフリカに注目せよ。彼こそ救い主となる人物である。」と語ったと言われている<sup>8</sup>。そして1930年、ガーヴェイの信奉者たちにとって、この予言めいた言葉が現実のものとなった。この年の11月、エチオピアの皇太子であったラスタファリ (Ras Tafari) がハイレ・セラシエ 1 世 (Haile Selassie I) として皇帝の座についたのである<sup>9</sup>。ラスタファリ運動という名称が彼の皇太子名からきていることから分かるように、ガーヴェイの信奉者たちは、この王の戴冠を神の啓示と捉え、ハイレ・セラシエを救世主、生き神とみなしたのである。現在ラスタファリ運動の支持者 (ラスタファリアン) の正確な数は分からない。また一口にラスタファリ

運動といっても、そこにはいくつかの団体があり、教義も様々である。しかしハイレ・セラシエが救世主、生き神であるということは、ほとんどの支持者が認めていると言われている<sup>10</sup>。

元々、この運動にはジャマイカの打楽器などを使った儀礼音楽が存在していたが、ラスタファリ運動の精神を表す新しい音楽として、1960年代後半にレゲエが生まれた。1960年代のジャマイカではアメリカのリズム・アンド・ブルースの影響を受けたスカ、ロック・ステディと呼ばれる音楽が作られるようになっていたが、このスカ、ロック・ステディと儀礼音楽が結びつき、レゲエが生まれたと言われている<sup>11</sup>。そしてこのレゲエを大きく発展させたのが、ボブ・マーリィである。マーリィは彼自身がラスタファリアンであり、例えばハイレ・セラシエが1968年にアメリカのスタンフォードで行なった講演を『戦争 (War)』<sup>12</sup>という歌にするなど、ラスタファリ運動のテーマをレゲエのリズムにのせて数多くの楽曲を制作した。彼の世界的成功に伴い、ラスタファリ運動の音楽としてのレゲエもまた世界に認知されていったのである<sup>13</sup>。

イギリスにラスタファリ運動が入ってきたのは、エチオピア世界連盟 (Ethiopian World Federation)<sup>14</sup>の支部がイギリスにつくられた1968年頃だと言われている。イギリスにおけるラスタファリ運動の研究はあまり進んでいないが、アーネスト・キャッシュモアの『ラスタマン—イングランドにおけるラスタファリ運動』 (*Rastaman: the Rastafarian Movement in England*)<sup>15</sup>はその全体像を捉える上で有益だと考えられる。このなかでキャッシュモアが強調するのは、ジャマイカのラスタファリ運動とイギリスのそれとの違いである。イギリスのラスタファリの形成において、キャッシュモアが重要視するのは主に移民第2世代のイギリスでの経験であった。自ら海を渡ってきた第1世代とは異なり、第2世代のものたちは生まれたときから (あるいは物心がついたときから) イギリスで生活していたため、前世代に比べ差別や抑圧に対し敏感であった。イギリスでのラスタファリ運動は、そうした若い移民たちがジャマイ

カの先行者に多くを依拠しながら、それを自分達の社会的経験と結びつけた結果生まれたのであった<sup>16</sup>。またキャッシュモアは別のところで、若いラスタファリアンへ路上での聞き取りを行なっている。ここで注目すべきは、イギリスのラスタファリアンたちがパトワを使うということに言及した箇所である。

ラスタファリアンたちはジャマイカなまりを使用することで、白人との社会的な違いを強調した。(中略) 何年もの間、白人の独演コメディアン達があざけったり笑いのネタにしたりしたため、一般的にジャマイカなまりは「サンボ」というステレオタイプとして扱われてきた。(そのため) 古いジャマイカの人たちの多くはこのなまりを隠し、白人との会話をしやすくするため、アクセントを直してきた。ラスタファリアンたちはこれと逆のことをしたのである。(中略) あるラスタは私にこう語った。「もしあんたが白人ならそれ(パトワ)を理解することはできないね。唯一ラスタだけが理解することができるんだ」と。<sup>17</sup>

このように、1960年代後半から70年代のイギリスにおいて、若い移民第2世代たちは、ブラック・パワー運動やラスタファリ運動の影響を受けながら、侮蔑的にあつかわれてきたパトワを肯定的な意味に読み換え、自らの言葉として叫び始めたのである。

### 3. 「英語圏の中心でパトワを叫ぶ」という文化実践

LKJの活動も基本的にこの文脈の上にあるといっ  
てよい。彼自身イギリス・ブラック・パンサー党に関わっていたし、また、初期の詩にはラスタファリ運動に影響を受けた作品が数多くみられるからである。しかし、LKJは1978年9月の音楽雑誌のインタビューにおいて、「自分はラスタではなく、現実主義者だ。(中略) 自分がラスタファリアンではないことは強調しておきたい。」<sup>18</sup>と答えている。同様に、

1997年2月に日本を訪れた彼は、鈴木慎一郎のインタビューに対し、次のように語っている。

たしかに1970年代初め、ラスタの主張に賛同した。彼らはこう唱えた。文化や宗教や言語における西欧の支配にはうんざりだ。われわれが賞賛すべきは、アフリカの文化や遺産であり、自由のため闘ったマンデラやガーヴェイなどのヒーローだと。英国で青年期迎えた者としてこれには共感できた。だがセラシエが神だとは信じなかったし、黒人はアフリカへ帰るべきだとも思わなかった。われわれは前に進んでいくのであって、時計の針は元に戻せない。<sup>19</sup>

こうしたインタビューが示しているように、LKJはラスタファリ運動の主張に基本的に同意しながらも、アフリカ回帰主義の面には強い違和感をおぼえ、ラスタファリアンを自称しなかったのである。彼のこうした姿勢には、ある人物の影響が深く関わっている。同じ日本でのインタビューの別の場面をみてみよう。

C.L.R.はじかに知ってるよ。レイス・トゥデー・コレクティブに私がいた頃、彼は思想的には私たちのリーダーだった。組織に加わっていたわけではないが、彼は私たちのオフィスがある建物の上階に住んでいた。私も何かと買い物に行きあげたり、彼の部屋で話しをしたりした。いろんなことを聞かれたな。どこの出身だ？どこの学校に通った？お父さんとお母さんは何をしてる？きみは何をしてる？こんな具合に。レゲエをやってます、詩を書いていますって答えると今度は、どこで演ってる？どんな人が観に来る？それでいくら稼いでる？っていう感じだった。そうだな、C.L.R.とじかに知りあえたことは名誉だ。<sup>20</sup>

このインタビューで触れられているC.L.R.とは、シリル・ライオネル・ロバート・ジェームズのことである。ジェームズはトリニダード出身の作家・思想

家で、本橋哲也によれば「エメ・セゼールやフランク・ファノンらと並んで、20世紀後半から影響を持ったポストコロニアリズムという植民地主義批判の思潮の発達に貢献した、いわば『第一世代』のポストコロニアル知識人のひとりである」<sup>21</sup>。また、レイス・トゥデー・コレクティブとは『レイス・トゥデー』というイギリス国内外のブラックに関わる政治・文化を扱う雑誌の編集部で、1970年代から80年代にはLKJも深く関わっていた。ジェームズはロンドンにある『レイス・トゥデー』編集部の階上にある部屋で、その晩年を過ごした。彼はそこで、LKJをはじめとする『レイス・トゥデー』関係者にさまざまな助言や影響を与えたのである。

ジェームズの著書と言えば、邦訳もある『ブラック・ジャコバン—トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命—』<sup>22</sup>であろう。本書があつかったテーマは、副題にあるとおり、1791年に起こった「ハイチ革命」である。ジェームズにとってハイチ革命は、「史上唯一の成功した奴隷反乱であり、克服すべき困難を数多く抱えていたことは、この反乱が含む意義の巨大さを明証している。仲間が100人いてもたったひとりの白人のまえでさえ恐れおののいていた奴隷たちが、みずから組織し、当時最強のヨーロッパ諸国を打破しようとする人民へと変容していった過程は、革命闘争とその成就における偉大な叙事詩のひとつ」<sup>23</sup>であった。本書の初版は1938年に出されているが、奴隷による革命闘争の成果と課題を克明に描くことによって、ジェームズは当時のアフリカにおける反植民地主義闘争を後押しすることを企図したのである。さらに1963年には、補論「トゥサン＝ルヴェルチュールからフィデル・カストロへ」を追加し、今度はカリブ地域での闘争を支援した。このように、本書は数十年に渡って世界各地の反植民地主義闘争を鼓舞してきたのであり、この文脈においてイギリスの移民にも影響を与えたことは間違いない。しかしジェームズの主題はこれに留まったわけではない。彼は積極的にカリブソやクリケットなどのカリブ地域文化についても論じていった。こうしたジェームズの文化論について、『ブラック・

ジャコバン』に解題を寄せた石塚道子はこう述べている。

この時期（1960年代）の彼は、カリブ文化とりわけスポーツ、美術、音楽にかんする多くの評論を執筆した。トリニダード島のカリブソ歌手であるマイティ・スパローにかんする評論『マイティ・スパロー』（1961年）はその代表的なもののひとつである。当時のカリブ地域では、みずからの文化をアフリカとヨーロッパ文化の要素の複合物であると把握し、その価値を論じることに人々はためらいを感じていた。つまり、洗練されたヨーロッパ文化にたいして、カリブ文化は、たんに「遅れた」、あるいは「くずれた」状況のヨーロッパ文化であると考えていたのである。（中略）しかしジェームズは、独立にさいしての文化的アイデンティティの重要性を明確に認識し、それまで語られることがなかった民衆文化に光を当てたのである。<sup>24</sup>

こうしたジェームズの文化の捉え方は、ラスタファリ運動を主導したマーカス・ガーヴェイと対比することで、より鮮明となる。あらゆるヨーロッパ的要素を排し、ブラックの「純粋性」を主張し、白人への敵対姿勢を崩さないガーヴェイを、ジェームズは偏狭なブラック・ナショナリストとして批判する<sup>25</sup>。逆にジェームズが重要視したのは、ヨーロッパとは異なる「自分たちの純粋な文化」を捜し求めることではなく、ヨーロッパ文化から諸要素を批判的に奪い、そこから新たな文化を形成し自分たちのものにしていくような文化実践であった。さらに1981年、レイス・トゥデー・コレクティブが主催した彼の80歳記念講演のなかで、ジェームズはガーヴェイの「アフリカへの帰還」という主張も批判している。「ブラック運動の創始者」であり、彼がいたからこそ「自分がいまここにいる」のであると、ガーヴェイに敬意を払いつつも、「アフリカへの帰還」についてはまったく賛成できないとジェームズは言う。すなわち、「帰還という考えは、ここイギリスであなたたち

が直面しているさまざまな問題から、あなたがたを引き離してしまうのである」<sup>26</sup>。ジェームズによるガーヴェイ批判からわかる彼の主張は、文化の純粋性ではなくその混濁性を、過去との親和性ではなく現在性を根幹に文化実践をせよ、というものであった。「われわれはジェームズの思想に従った」<sup>27</sup>というLKJにとって、植民地において支配者の言語をもとにつくられた「自らの言葉」パトワを、自分が今存在するイギリスという英語圏の中心で叫ぶことこそ、まさにジェームズの説いたラディカルな文化実践だったのである。

## おわりに

本稿では、LKJのダブ・ポエトリーがどのような社会的・思想的背景をもとに制作されるようになったのか粗描してきた。ここまで見てきたように、アメリカのブラック・パワー運動とジャマイカのラスタファリ運動に影響を受けつつ、そこからさらにC.L.R.ジェームズを経由することで、LKJ独自のダブ・ポエトリーというスタイルができあがったと言えるだろう。しかし、そうした背景を探る中で、もう一つ重要な論点が浮かび上がってきたのである。それは『レイス・トゥデー』という雑誌の存在である。本稿でもジェームズとの思想的交流の媒体として『レイス・トゥデー』に言及したが、そもそもLKJが初めて詩を発表したのが同誌である。さらに彼の「盟友」でありジェームズの甥であるダーカス・ハウが編集長となった1974年以降、LKJは同誌で詩を発表するだけでなく、移民によるさまざまな文化作品を批評し、また同誌の編集に携わりながらイギリスのみならず第3世界の政治・社会問題にまでコミットしていくことになる。したがって、LKJに焦点をあてたイギリスの移民による文化実践をより広い文脈で包括的に理解するためには、『レイス・トゥデー』におけるLKJの活動の検討が、次に取り組むべき課題だと言えよう。

## 註

- 1 西谷修『世界史の臨界』（岩波書店、2000年）、214頁。
- 2 今福龍太『増補版 クレオール主義』（ちくま学芸文庫、2003年）、210頁。
- 3 Tom W. Smith, 'Changing Racial Labels: from "Colored" to "Negro" to "Black" to "African American"', *The Public Opinion Quarterly*, 56-4, 1992.
- 4 Tariq Modood, 'Ethnicity and Political Mobilization in Britain', in Glenn C., Tariq Modood and Steven M. Teles (eds.), *Ethnicity, Social Mobility, and Public Policy: Comparing the USA and UK*, Cambridge / New York: Cambridge University Press, 2005, p.461.
- 5 ストークリー・カーマイケル（長田衛編訳）『ブラック・パワー』（合同出版、1968年）、59-60頁。
- 6 ガーヴェイの思想については、Amy Jacques Garvey (ed.) *The Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, New York: Arno Press, 1968-69.を参照のこと。
- 7 Amy Jacques Garvey (ed.) *The Philosophy and Opinions of Marcus Garvey volume 2*, New York: Arno Press, 1968-69, pp. 37-38.
- 8 レナード・E・バレット（山田裕康訳）『ラスタファリアンズ—レゲエを生んだ思想—』（平凡社、1996年）、113頁。
- 9 このため、現在ではガーヴェイはラスタファリ運動の創始者ではなく、あくまで「預言者」であるという見方が一般的である。
- 10 佐久間孝正『変貌する多民族国家イギリス—「多文化」と「多分化」にゆれる教育—』（明石書店、1998年）、201-203頁。
- 11 バレット（1996年）、302-303頁。
- 12 この曲は1976年のアルバム『ラスタマン・ヴァイブレーション』に収録された。
- 13 しかし、当時もそして現在でもレゲエをラスタファリ運動の音楽と認めていないラスタファリアンたちは存在する。
- 14 エチオピア世界連盟は、イタリアの植民地主義に対するエチオピアの抵抗に支持と援助を訴える目的で、1937年にニューヨークで結成された。翌年にはジャマイカにも支部が設けられている。
- 15 Earnest Cashmore, *Rastaman: Rastafarian Movement in England*, London: Unwin Paperbacks, 1983.
- 16 Cashmore (1983), pp. 56-58.
- 17 Earnest Cashmore, 'The Rastaman Cometh', *New Society*, 25 August, 1977, p. 383.
- 18 *Sounds*, 1978, Sept. 2, p.25.
- 19 鈴木慎一郎『レゲエ・トレイン—ディアスポラの響き—』（青土社、2000年）、98頁。
- 20 鈴木 前掲：101-102頁。
- 21 C.L.R.ジェームズ（本橋哲也訳）『境界を越えて』（月曜社、2015年）、440頁。
- 22 シリル・ライオネル・ロバート・ジェームズ（青木芳夫監訳）『ブラック・ジャコバン—トゥサンニルヴェルチュー—

ルとハイチ革命―』(大村書店、1991年)。

- 23 ジェームズ 前掲：13頁。
- 24 ジェームズ 前掲：469頁。
- 25 Cyril Lionel Robert James. 'Black Power', in Anna Grimshaw (ed.), *The C.L.R. James Reader*, Oxford: Blackwell, 1992.
- 26 Margaret Busby, and Darcus Howe (eds.) *CLR James's 80th Birthday Lectures*, London: Race Today Publications, 1984, p.58.
- 27 Robin Bunce and Paul Field. *Darcus Howe: A Political Biography*, London: Bloomsbury, 2015, p.161.

(いながき・けんじ 一般教育等／歴史学、社会学)  
(2016年10月31日 受理)

